

Newsletter

第171号
2025年10月23日発行

10月号は、p.1-2『ホームカミングデイ』、p.2-3『ホームカミングデイ午後の部 人と会う うれしさ!』、p.3『新治の工房での木工作業』、p.4-6『農業実習を終えて』、p.6-7『お父さんのための講座「粘土」体験記』、p.7-8『子どもといっしょのくらしかた2025』のトピックでお届けします

ホームカミングデイ

1期生、6期生、現6年生担任 長井 麻美



横浜シュタイナー学園開校20周年記念イベントであり、1年以上前からプロジェクトチームが文字通り身を粉にして準備してくださった「ホームカミングデイ」が9月27日土曜日に開かれました。

午前は「卒業生座談会」。この学園を巣立った子どもたちの有志が在学保護者や現役引退した元教員の皆さんの前で在学中のエピソードなどを語る企画です。わたし自身は企画運営チームに所属していなかったのですが、こんなに大勢の子どもたちが集まってくれた経緯については詳しくありませんが、貴重な時間を割いて集まってくれた子どもたちへの感謝の気持ちでいっぱいになりました。特設の「ひな壇」には2期生からこの春卒業したばかりの12期生まで、幅広い世代が並んでいました。司会を仰せつかったのは、1期生、2期生担任だった長井と神田昌実先生。赤青色違いの20周年記念Tシャツを着て「ひな壇」の両脇に座り、気分を盛り上げました。順番に簡単な自己紹介をしてもらい、いざ、質問開始です。

質問内容は、あらかじめ用意してありました。「学園生活を振り返って、印象に残っていることは何ですか。」や「この学園で学んだからこそ大事にしていること、信じていること、意味があったことは何ですか。」など。質問のひとつひとつに皆が誠実に答えてくれました。(この日の質疑内容はテープ起こしされるのでいつか読むことが出来るようになるかもしれません。)この場では、司会をさせてもらった中で特に印象に残ったことを記そうと思います。

「学園生活を振り返って」の質問には歴史の授業が、暗記

ではなく前後関係を理解していく学び方で面白かったという発言や、手仕事や音楽、オイリュトミーを学んできたお陰で今も体を動かし、手を働かせてモノを作ることが当たり前になっていることを口々に語ってくれました。一度身に付いた感覚は、忘れたかのように思えてもすぐに取り出せるのだな、と感心しました。音楽との関わりについても気の合う仲間が集まり、1つの作品を皆で作り上げていく楽しさを一度味わった人たちは、またいつでも楽器を持ち寄り、音楽で心を通わせることができるのでしょう。

途中で、駆け付けてくださった元先生たちの近況や懐かしいお話を伺い、座談会は後半に入りました。

司会者が次の質問を探していたら、後ろから「先生、保護者の皆さんからの質問をいただかなくてよいのですか?」とRくんの声掛けがありました。時計を見ると残り時間あと15分!慌てて在学保護者からの質問コーナーに入りました。ここで印象に残ったのが「メディア、AI談義」。先ほどのRくんは現在高校三年生で大学受験準備中の忙しい身。高等部に入ってからコンピューターやスマートフォンを使って作業することが増えてきたそうです。メディアとの出会いが遅かったためにどう付き合うかで苦労している。AIに頼りっぱなしになっては、自分の存在価値を感じられない危機感がある。自己肯定感を失わずに前に進むにはどうすればよいか模索している、とほろ苦い現実を語ってくれました。そんな彼の夢は「音楽で人と人との間を繋いでいく仕事をする事」だそうです。自己肯定感の危機、と本人は言いましたが、どんな困難な時期でもちゃんと真正面を向いて歩んでいるように見えました。そのRくんの話を受けて、すでに社会に出て夢に向かって準備中というHさんは「わたしは高校卒業するまでスマホを持たなかったから、今少し苦労することがある。できたならもう少し早く持ちたかった。」と話すので、すかさずRくんが「じゃ、何年から?」と訊ね、周囲の緊張が(特に教員たち)高まりました。Hさんは「わたしがスマホを持ったのが高校卒業後だったから……。高2?」、爆弾発言かと教員一同はドキドキしていましたが、彼女の答えを聞いてほっと安堵の胸をなでおろしました。

そのほか、「学園生活を振り返って何気ない毎日が今考えると大切な日々だったんだなと思います。」と語ってくれた卒業生がいました。その言葉を聞いて、心が温まる思いでした。

一人ひとりが語ってくれたすべてはこの紙面に載せられませんが、雰囲気や少しでも感じ取っていただけたら幸いです。我が卒業生（卒業まで学園にいなかった子どもたちも含め）たちの清々しい姿をまぶしく感じました。10年、20年先の

彼らが社会に出てより「自由」に生きてゆけますように、と心から祈ります。

会の終了後、登壇してくれた彼らには特製オヤジカレーのお振る舞いがあり、大変喜んでいただきました。

ホームカミングデイ午後の部 人と会う うれしさ！

10期生担任、現教務担当教員 西尾 早知子

創立20周年プロジェクトのホームカミングデイは2024年の秋より準備してきました。さらにさかのぼれば、創立15周年の時に行ったかった企画でした。

「誰が企画したのですか？」というよい質問をしてくださった保護者さんがいました。

親御さん側からの気持ち、教員会（主に20周年プロジェクトチーム）の卒業生に会いたい！という気持ちがうまく重なったから実現できた企画でした。

学園には卒業生名簿（正確には住所録）はなく、いかにして卒業生にお知らせしようかと頭を抱えました。

そこへ京田辺シュタイナー学校には、「親鳥の会」という卒業生保護者の会があり、横浜にも作りたいと決意して下さっていた7期生と11期生と現9年生保護者でもある清水さんをはじめ何名かの保護者さんがいらっしゃいました。そのみなさんが20周年プロジェクトの中での、卒業生分科会チームとなりました。「ミモザの会」と名前が決まったのは2024年末でした。保護者さんの呼びかけに応じて、企画段階から名乗りでてくれた卒業生さんたち、本当にありがとうございました。その後、初めてのホームカミングデイはまず在校している側が中心となり、卒業された皆さんをお招きするという形になりました。

お知らせの郵便物が戻るときに落胆したり、あの方には〇〇さんが会うかもしれない、ならば手渡ししてもらおう、と4月に発送大作戦を終えました。卒業生をお招きしたい企画なのに、卒業生が来校してくれなかったら？という心配事も、午前の時間の話し手さんが名乗り出てくれる度に、解消されていきました。7月には会場の配置、流れなども、イベントチームの皆さんとともに案を練り、参加者数から自己紹介の時間を割り出していきました。

当日、手仕事専科教員の柳本先生はハンカチの下にストップウォッチをしのばせ、チリーンとフィンガーシンバルを鳴らすつもりでした。お名前、何期生か？今何をしているか？父です、母ですとオイリュトミー室で立ってのご家庭まるご



との自己紹介。皆さんがコンパクトに話して下さったので、全員が顔を合わせて紹介を聞くことができました。一人ひとりの様子をもっと聞きたい気持ちを、会場の皆さんもお持ちだったことでしょう。

教員たちは、演じた役者本人たちを前に、8年生劇ダイジェスト版をお届けする緊張感を味わいましたが、大きな笑い声をもらって満足いたしました。

音楽専科教員の伏見先生による、歌の時間には、卒業生や保護者の伴奏つきで、保護者が作詞した20周年記念ソングも披露されました。最後を歌ってお開きにできた嬉しさも皆さんが感じられたことと思います。

こちらからお願いした日にちに、南は、九州・熊本から、西は福井から、北は東北・仙台からお集り下さったみなさま、ありがとうございました。

旧在校生保護者のみなさまにとって、大きくなったわが子にとってはもう過ぎ去った9年間でしょうし、そこには嬉しい思い出ばかりでなく、まだそっとしておきたい気持ちもあるかもしれません。当の在籍した生徒たちにとっても、会いたい、会いたくないという気持ちは一人ひとり異なると思います。

一人ひとりの学園への気持ちは違う、そうだととしても、それを「人それぞれだね。」とまとめてしまうことはなく、今、集まれる人が集い、あのような時間を過ごせたことが宝物でした。

多くを語ることはできずとも、学期祭や修了の会のように発表する演目がなくとも、それぞれが名乗ることが、ハレの空間でした。今の一人ひとりに会って、その子とご家族を想う時間でした。画面を通して、相手の顔を見て話すこともできる時代ですが、オイリュトミー室にわざわざ来てくれたみなさんからたくさんのものを受け取りました。参加した保



護者・教員がしばらく経っても、「余韻に浸っている」「元気をもらった」と口にしていました。

ここに集まった人も、今ではないと思った方も、また、ホー

新治の工房での木工作業

コロナが流行っていた頃、当時の8年生が教室で木工作業をしていました。ノミや彫刻刀を木槌で叩き、木の器を作っていたのです。すると在宅勤務をしていた階上の住人の方からうるさくて迷惑だという苦情が来ました。それ以来十日市場校舎では大きな音が出る木工はできなくなっていました。のこぎりで切ったり、小刀で削ったりする小物作りの木工はしてきましたが、サラダボールや大きめの木彫を作ることはできなくなりました。仕方がない、この環境では無理だと諦めるしかなかったのです。

しかし、7年生以上の生徒たちには知力や体力を使う芸術活動が必須です。思春期の若者たちが抱える心理的なモヤモヤなどは芸術を通して昇華することにより、彼らを一段高い状態に導く助けになるからです。演劇・木工・鍛金・鍛冶・彫刻・製本など道具や設備が必要な活動が7年生から12年生までのカリキュラムの中に多く見られるのはこのためです。これらの活動には専門知識や体験を持つ職人とも言える指導者も必要ですが、横浜シュタイナー学園では7～9年生までの間に木工と8年生劇は担任に任せられ、鍛金は9年生が藤野の工芸室をお借りして、鍛金の先生に指導を受けています。

現在担任している14期生が7年生になり学園祭のメンバーになって縁日の景品を作っている時、何人かの男子がノミを使って大きな材を木目に添って割る作業に熱中していました。切り出した材はペーパーナイフやバターナイフや箸に加工されましたが、有り余る体力で「木材を割る」ことが彼らを癒しているように見えました。

そこで大きな音をたてても苦情が来ることがなく、思い切り生徒たちが木工を体験できる場所が欲しいと強く思うようになりました。そんな話を園芸の和久井先生にすると、新治市民の森の工房を使わせていただく可能性が生まれました。



ムカミングデイでお会いしましょう。ホームは、みなさん一人ひとりの心の中に、でも時々、学園のことを思い出して、ただいまと足をお運びください。いつでもお待ちしております。

8年生担任 神田 昌実

20年前、霧が丘に横浜シュタイナー学園が生まれた時には新治市民の森の存在を私たちは知りませんでした。開校から10年程して当時の3年生の担任が谷戸田を守る会に参加し、自分が担任している子どもたちに米作りの体験をさせる準備を始めました。そこから新治里山交流センターのスタッフの方の紹介で近隣の田んぼをお借りして、3年生は毎年米作りの体験ができるようになりました。その後和久井先生が園芸の担当になり、園芸の授業カリキュラムが検討されるようになりました。校庭が小さく、園芸のための畑もない我が校では新治市民の森の活動は子どもたちを健康に育てる上でどんどん大きな存在になっています。

そして今年、みはらし広場にある木工の工房で8年生が木工作業をさせてもらえるようになりました。7月の初めに1回、9月に2回、今まで合計3回、屋外で思い切りノミを振るえる体験をしました。作っているものはちょっと深めの木の皿です。私も参加しカレー皿にするつもりで頑張っています。

道具は全て貸していただけますし、木材は間伐材をいくらかでも使ってよいとのことで、間伐した朴の木（ほうのき）の直径40センチ、長さ1mほどの幹を皿作りに必要な長さで厚みのある材に切り分けるところから始めました。そこから皿の中の部分を彫り、余計な部分を切り落とし、外側を整え、紙やすりで仕上げます。男子は力があるのでカンカンと大きな音をたててノミを振るい、ずいぶん進めました。どんなに大きな音をたてても、その音はセミの声や小鳥の声と一緒に全部森の一部になっていきます。出た大量の木くずも森に還せばよいと木の根元に撒いています。木漏れ日の揺れる木陰のテーブルで汗を流しながら行う作業は毎回心地よい達成感を与えてくれます。10月にも2回行く予定です。毎回付き添って下さり、子どもたちの作業を見守りながらご自分はスプーンを彫っていて、必要な時にだけの確かなアドバイスをしてくださる新治市民の森愛護会の江川さん、野田さんには心から感謝しています。頼れる森の先生です。

このご縁を大切にこれから小さな子たちから大きな子たちまで、自然と共存する学びの体験を続けていけたらと強く願っています。横浜シュタイナー学園が新治市民の森の近隣にあって本当に幸運だったと心底思います。新治市民の森を維持するために活動してくださっている全ての方々に深く感謝いたします。そして私たちもその一端を担い関わっていけたらと思っています。私たちが遊びに行ったり安らぎをもらいに行ったりする森は、誰かが守ってくれているから、そこに在るのだということを教育の中で子どもたちに伝えていきたいです。

私が初めてバイオダイナミック農業に出会ったのは、今から 25 年前の夏だった。アメリカのシュタイナー・カレッジに隣接するその農場は、緩やかな起伏があり、真ん中には泉があってフローフォームと呼ばれる階段式の独特な形の噴水が、絶え間ないメビウス回転の流れをつくって循環していた。目線のずっと先には木々が茂り、涼し気な空気を醸し出している。その農場全体が、不思議なほどにいつもきらきらと輝いているのだった。農場を仕切るハロルドは穏やかな笑みをたたえ、こう言った。「バイオダイナミックはただの有機農法とは違う。それはこの自然、そして宇宙と調和した農業なんだよ。私たち人間は呼吸によって命を維持しているでしょ。動物も、植物も、そしてこの地球自体も呼吸しているんだよ。宇宙全体がその秩序をつくっているのだから、それを考えて、エネルギーがうまく回るようにするのが、地球にとっても、植物にとっても、人間にとっても健康なことなんだ。」

あれから四半世紀が過ぎ、伊藤クラスの子どもたちもいよいよ農業実習をする学年になった。その場所として BD（バイオダイナミック）農場を選べたことは、本当に大きな喜びとなった。北海道にある広大な BD 農場、ソフィアファームを仕切るベンさんとこのみさんは私たちをあたたかく迎えてくれた。今回の実習には昨年度に同じ場所で体験している横山先生と西尾先生も同行してくれて、心強い限りだ。私も 2 年前に 11 期生の実習でお供させてもらっているのので、「ただいま」という気持ちで思わず頬が緩む。

9 年生は、この日を本当に楽しみにして準備をしてきたのだが、心の高揚とは裏腹に体調面でははらはらする出だしとなった。学園祭の前後に体調不良の波がじわじわと低学年から広がり始め、学園祭をやり切った直後の 9 年生の中にもその波をしっかりとこうむった子たちがいたのだ。ふたりの子は少し遅れて合流することとなり、4～5 人の子は次々に発熱して現地で看病することになった。また夜になると「先生、のどが痛い。」「咳が出る。」「眠れない。」といった声で、私は大家族のかあちゃんさながら、体温計やらのど飴を持ってあっちこっちへ足を運ぶこととなった。不謹慎ではあるが、弱った思春期の子どもを介抱する母の気持ちを思い出し、ちょっぴり嬉し懐かしの感情もあったことを告白しておく。

そんな子どもたちだが、さすがに回復力は素晴らしく、元気になるにしたがって仕事にも、また遊びにも精が出て、日中は軽トラの荷台やトラクターの上ではしゃぎ、堆肥の積み重ね作業も張り切って行った。くたくたに疲れているかと思いきや、帰宿後にバスケットやバドミントンに興じる姿を見ない日はなく、子どもたちの体力に感心するばかりだった。

日中のファームのお仕事は大忙しで、みんなよく働いた。後から合流したふたりも交えて、3 つの班に分かれ、早朝 4 時起きのお乳しぼりや、お昼の食事作り、草刈りやハーブの収

穫、ハーブソルトやソフトクリームの商品作りもさせてもらう。毎日山ほどある仕事をローテーションで担った。

日々の仕事はその日の天気だけでなく、月や惑星の動きや位置によって定められている。12 の星座は水、熱、土、光の 4 つの要素に関連し、それに合わせて「葉の日」「花の日」「根の日」「実の日」が決められ、収穫するものや作業が示される。その中でも BD 農法の調剤づくりは興味深く、牛の角に牛糞をつめたり、鹿の膀胱にノコギリソウの花を詰めたりといろいろな手間と時間をかける。フレッシュな牛糞を集めて大きな板の上に広げ、途中で石灰などを混ぜながら、1 時間もの間混ぜ続けるということもした。ノコギリソウの花摘みは「花の日」ではなく「実の日」に行くというのも面白かった。近代化にともない、あらゆる側面で古代からの叡智が効率的、合理的手段にとって代わってしまったが、人の暮らしも、もっと宇宙のリズムに即したものであるべきなのだろうと思った。



夏至の日、まだ 6 月にもかかわらず、30 度越えの暑さとなった。このみさんは笑顔で言う。「植物たちにとってはこの太陽のエネルギーはとても喜ばしいこと」だと。ついつい人間本位で快適な気温を望む自分を恥じ入った。この日、火を焚いて水を温め、出来上がった調剤を混ぜて、大地に散布するという作業をした。夏至のお日さまのエネルギーがたくさん入った調剤は、20 分間絶え間なくそれぞれのバケツの中で何度も何度も渦をつくっては壊すことが繰り返されて完成する。その特別なエネルギーの入った調剤の水を各自バケツに入れて片手に持ち、クマ笹を箒のように束ねたものを使って、New スコットランドと呼ばれる広い広い斜面の上から全員で横並びになって散布しながら降りていく。大きく虹のような弧を描くように振りながら「ありがとう～」「愛してる～」「大地に愛を～」と叫びながら楽しそうに散布を



繰り返す子どもたちのその様子は大層美しく、ベンさんも思わず「天使や精霊たちが喜んでるのが見えるようだ。」と感嘆の声を上げていた。その晩の夕べの集いでは「スペシャルな調剤を混ぜている途中で、水の質が変わったように感じた。」「宇宙のエネルギーが入っていくように感じた。」というコメントが聞かれた。

BD 農業ではブラックデーと呼ばれる農作業ができない日がある。その日、私たちは阿寒湖のアイヌの町《アイヌ・コタン》へ遠足に出かけることにしていたのだが、その出発前の朝早くにとっても貴重な体験をすることになる。私たちが毎朝乳しぼりをする場所、ミルキングパーラーにはこどもの雄牛が1頭いて、その愛らしい瞳を持つ人懐っこいボビーちゃんのことをみんな大好きなのであるが、そのボビーちゃんの去勢に立ち会うのだ。「農場で一緒に育つためには必要なことだから。」と事前に説明していたものの、壁に押さえつけられ声を発して涙を流すボビーちゃんやすぐそばで心配そうに見守るお母さん牛を目の当たりにして、9年生一同静かに周りを取り囲み、固唾をのんで見守る。男子ふたりはボビーちゃんをしっかり押さえるお役目も得て、緊張しながらも力を込めて、ベンさんをサポートする。手術道具はカッターナイフとペンチ、あとは素手だ。無事に処置が済んで、緊迫した時間が終わり、その場所に朝陽が注がれて9年生たちの顔によりやく安堵の色がひろがった。農場に暮らす人の逞しさに触れた出来事だった。

その後、みんなでバスに乗り込み、アイヌの町《アイヌ・コタン》へと遠足に出かけた。阿寒湖のすぐ隣は森になっていて、ポッケと呼ばれる場所がある。アイヌ語で《煮え立つ泥》という意味の通り、そこは1年じゅう100度以上の温度でぼこぼこと音を立てながら泥が煮え立っており、真冬も雪が積もることがないそうだ。子どもたちは「本当に大地の鼓動だ。」「地球は生きているんだな。」と呟き、感心して見

つめるのだった。アイヌの人々がその土地やそこに生息する植物や動物に敬意を払いつつ共存していたことを感じられる一日となった。

農場の仕事は「今ここ」だけでなく、先を見ておく必要がある。特に自然の中でのびのびと暮らす牛たちが冬の間食事に困ることのないよう、保管用の牧草をしっかりと巻き付けておくこともさせてもらった。何しろ、土地はとても広大で、ベンさんとこのみさんの二人で管理、維持するにはあまりにもたくさんの仕事量なので、みんなここにいる間は自分にできることを精一杯行った。

そうして、いよいよ農場での最終日。お昼ご飯はBBQだ。もちろんそのお肉はここで暮らしていた牛さんだ。子どもたちは「今まではただ“おいしい、おいしい”と食べていたけれど、よく味わって感謝して食べたい。」との思いを伝えてくれた。

また、今回、楽器を持参した子が4人いて、チェロ、バイオリン、フルートが2台揃っていた。最終日の夕方、子どもたちが大好きな場所ミルキングパーラーの2階で演奏会が行われた。ベンさんとこのみさんへの感謝の気持ちも込めながら。最後の曲は『KANNA KAMEME』。みんなで踊り歌ってお別れとなった。この歌声も、きっとこの空と大地に浸み込んで循環のひとつになっているに違いないと思い、胸が熱くなった。

その晩、全員が眠りについた後、ベランダに出て空を見上げた。すると明るく輝く流れ星が、目の前の大きな夜空を横切ったのだ。2週間の間、それぞれが（病気も含めて）やるべきことをやり切った。その証のように感じた。2つ目の流れ星を見た時、「子どもたちは一体何を意図してこの地上にやって来たのかな。同じ頃を選んで、この仲間たちと出会うべくして出会っているのだろうな。」などと思い巡らせ、彼ら一人ひとりを含む、世界の秩序がうまく回りますようにと願った。

帰りのフェリーからは北海道の地に沈みゆく真っ赤な夕日が見えた。それを見つめながら「さようなら、北海道。」「ありがとう、ソフィアファーム!」と叫ぶ子どもたちの背中の中のシルエットが少し大きくなったように感じた。

子どもたちは今回の体験でたくさんの感想を残してくれた。大変だったことの先に得た達成感、楽しかったことや嬉しかったこともたくさんあった。農場だけでなく、長期間の共同生活で体験した葛藤や喜びもあった。その中でも特に印象深いのは、ベンさんとこのみさんの生きる姿勢から、受けとってくれたものが多かったことだ。「農業とは生活そのもの」「農業はアート」といった言葉を、自身の中に留めてくれた子も多かった。

この19人がこの先どんな人生を歩んでいくのか、まだ先のことは見えないけれど、いつか「コレだ」という道に出会った時は、信念を持ってその道を歩んで欲しいと思う。ベンさんとこのみさんがそうであったように、その道が本当に自分

の行くべき道であるならば、きっとその時その時に必要なことは差し出されるだろう。

ベンさんは熱く語る。「バイオダイナミック農業は、ここだけで発展すればいいわけじゃない。世界中のあちこちで、それぞれの土地にあったやり方でいい循環がつくられるのが一番いいこと。だから、若い人たちが、ここに来て私からすべてを学んで、自分の生きる場所でそれをやっていって欲しいんだ。」と。25年前に私がBD農場で感じた調和のエネルギーは、私をシュタイナー教育の道に向かわせる一助になったと思うが、今回子どもたちが受け取ったであろうものもまた、彼らが自身の道を歩く際にきっと何らかの作用をもたらすことだろうと思う。

今回の体験をサポートしてくださった、ベンさん、このみさんをはじめ、横山先生、西尾先生、運転を一手に引き受け

てくださったバス会社ムーブアシストさんの渡辺さんと足立さんに心より感謝を申し上げます。



「お父さんのための講座『粘土』」体験記

3年生保護者 秋山 朋三

「お父さんのための講座『粘土』」に参加しました。8～9年生の幾何学の学びの体験です。

この講座は、正多面体のいくつかを粘土でつくってみようという内容でしたが、すぐにその趣旨ややり方を説明して実践に移らないのがシュタイナー教育。身体と心で味わうことから始まります。

はじめに、両手で包んでぎりぎり収まる大きさの粘土を用意し、手のひら全体で包み込みながら、凹凸を満遍なくならしていきます。どこを押しても同じだけの圧力を感じるように。質感や温度を感じながら我が子だと思って気持ちを込めてじっくりと…。粘土としっかり馴染んで愛を育み、やがて自分の手のぬくもりと粘土のそれとが同じになっていきます。

「そうすると何ができますか？ そうです『球』ですね」と先生。はじめから「まずは球をつくります」と言われていたら、繊細な手の感触や我が子を育むような気持ちは得られなかったでしょう。

そして、お父さんたちは、もはや我が子と化した愛おしい球を手のひらに抱いて、オイリュトミー室に移動し輪になり

ます。ゆっくりと我が子を右隣の人の左手に託し、隣の人の子を左手に託され、両手のひらで感触を味わいます。どの子も自分の子と明らかにちがう。大きさ、温度、湿り気、質感やしわの具合も。でも、等しく尊い子どもたちです。

球のリレーが進むうちに、やがて我が子が自分の手に還ってくる。みんなそれがはっきりと分かるのです。うちの子がもどってきたと。

教室にもどって先生からの講義です。点がいくつあると線が生まれるか。いくつあると面が生まれるか。では、いくつあると立体が生まれる？ 正多角形の面からなる正多面体にはどんなものがあるか。それらをプラトン立体というそうです。

ここからが実践です。まずは正四面体。正三角形の4つの面からなる立体です。どの面も正三角形になっているか、じっくり確かめながらかたちづくっていきます。底面が正三角形のピラミッドのようなかたちが完成します。

そして次に正八面体。難易度が一気に上がります。2つの四角錐の底面同士がくっついたようなかたちだと頭で分かっているけど、全体のかたちと1つずつの正三角形の面の正確さに気を配って整えるのがなかなか難しい。

残り30分となったときに、「正十二面体もやってみますか？」と先生。自分が空気を読まず「やってみたい」と言っただけで、参加者のみなさんに苦行を強いることになってしまいます（ごめんなさい）。正十二面体は、12の正五角形の面で成り立ちます。正五角形というだけですでに難しそうなのに、それを12面均一にすることの難しさと言ったら。途中、抜本的につくり直すメンバー続出。



身体と心と頭がシンクロした状態をつくるのが難しい。これはシュタイナー教育のあらゆる学びの原則なんだろうと、身をもって感じたのでした。

粘土を自分の子どもに見立てて、じっくり向き合い、愛を注ぎ、預け合い、他の子との違いと自分の子らしさに気付かされ、思うようにならない試練も訪れる。先生が意図してかは分かりませんが、この一連のプロセスは子育てそのものだったと思います。

あっという間の2時間。脳からいろんなものが分泌して、異様に頭がスッキリしていることに気付きます。仕事で頭ばかり使っている日常ではなかなか得難い状態です。

さて、AI時代です。人間の集合知を瞬時に束ね、正解らしきものがすぐに出てきて、その正解率はどんどん上がっていくでしょう。でも、自分の身体と心と頭で実感をともなって身に付いたこと、これに勝る「自分にとっての答え」はないし、そうして得られた答えにしか自分の熱は生まれない。その熱量があってはじめて他者や社会に働きかけることがで

き、価値や豊かさを共創できるのだと思うのです。

シュタイナー教育はその原動力を育む教育だと、また一つ確信を深められた体験でした。このような機会をくださりありがとうございました。



こどもといっしょのくらしがた 2025

学園公開グループ担当 手仕事専科教員 柳本 瑞枝

この催しは2017年、それまで神奈川県エリアのシュタイナー幼稚園のみなさんが行っていた「神奈川子育てフェスタ」を基盤に横浜シュタイナー学園が主催を引き継ぎスタートしました。

学童期のシュタイナー教育の基盤はやはり幼児期からの生活・育みが大切であり、その基盤があってこそ、その後の子どもの人生が豊かに実りあるものになっていくと考えています。だからこそ、お父さんお母さんになったみなさんがその豊かな子育てに出会い、日々の子育てのヒントをつかんでもらいたいと願いこの催しを続けてきました。

これまでコロナ禍や台風の影響で開催できない年もありま

したが、学園を会場にして幼児教育の大切さを伝えてきました。

今年度は学園創立20周年。夏には様々な行事も抱えており、学園を会場にしての夏休みの開催は厳しい状態にありました。それでも、この催しの意義、昨今のシュタイナー幼稚園の存続の難しさを少しでも助けたい思いが高まり、外部会場での開催を模索して参りました。

そんな時、学期祭でも使わせていただいているホールのあるみどりアートパークのギャラリー会場に巡り合いました。そこは長津田駅からベビーカーを押したまま会場に入ることができる、幼児さんを持つ親御さんにぴったりの会場でした。十日市場校舎オイリュトミー室の二倍ほどの会場は天井からのパーテーションにより、ブース分けが容易にできることが分かり、それぞれのコーナーを工夫して設営することで豊かで温かな空間を作り出すことができました。

オープニングはライアーの会のみなさんの奏でるライアーの美しい音で始まりました。会場の一番奥にはようちえんの部屋としてシュタイナー園の保育室を再現。天井から吊るされた天蓋の下には畳が敷かれ、衝立に置かれたかごの中には、木の実、積み木、遊び紐、編みぐるみなどが置かれ、絶えず子どもたちがそれらで楽しそうに遊んでいました。

傍らには幼稚園の先生が見守り、お母さんやお父さんからの問いかけにも丁寧に答えてくださっていました。





そして中央にはいくつかの幼稚園、そして星の金貨さんの出展により、手作り品や書籍の販売も来場のみなさんを楽しませていただきました。また右手には学園のブースも設け、学童期の教育の質問にもお答えすることができました。

お昼前には保育室の横にある会場で、宮地陽子先生による子育てトークが行われました。

現代の子育て事情はこの10年ほどでさらに様変わりしており、良い方向としては、お母さん一人に育児を任せるのではなく、育児休暇を取れるお父さんが増えているというお話もありました。ただ、一生懸命に子育てに参画するお父さんが、育休明けになっても仕事も子育ても全力で向かうあまり、産後うつになる方が増えている、という驚く話がありました。

その一方で、スマホにアプリを入れて赤ちゃんが寝返りをするとアラームが鳴り、仕事部屋から駆けつけるお父さんが少なくないというお話も衝撃的でした。眼差しを向け、ぬくもりとともに関係を築き上げていく子育てが今危機的状況に陥っていると感じました。また、少し前によく言われた「叱らない子育て」というお話もでした。その言葉はそれだけが独り歩きしてしまい、大人が子どもの言いなりになってしまうことになりかねない、幼児期の子どもに対しても、きちんと“ここまで”という規範を伝えなければならない、というお話も印象的でした。そして、輪になっての座談会形式のお話し会は参加者一人ひとりの質問に宮地先生が丁寧にお答えくださり、どなたもご自身の聞きたかったことへの答えをもって帰っていただけたことと思います。

午後には「人形劇 おいしいおかゆ」が幼稚園の先生方によって行われました。温かく静かな語りの中、優しく柔らかな人形の動きが子どもたちをファンタジーの世界へと誘い、小さな幼稚園の椅子に座った子どもたちがひとみを見開いて全身で聞き入っている姿に心打たれました。

そして会場左手には、今回は無料のワークショップ4つを設けました。羊毛のお人形づくり、毛糸のねじねじ紐づくり、みつろう粘土のかたつむり、そして、画期的なワークとして公園の遊び方“食パン方式”です。これは横浜シュタイナー学園事務局長の佐藤さんによるワークショップで「公園

はパンの耳のように端っこにお宝がいっぱいある」というものです。公園の端にある木の枝や木の実、葉っぱや花びら、そこで探した宝物を使っての創造的な遊び。砂場を再現し、子どもたちに実際に遊んでももらいました。その遊び方にお子さんも親御さんも目を輝かせていました。

来場者は総勢20組ほどの親子さんではありましたが、ほとんどの方がお昼を挟んで長い時間滞在してくださり、十分に楽しんでくださいました。朝いちばんには泣いて会場に入らなかったお子さんが、帰りにはスタッフみんなに手を振ってバイバイするくらい楽しんで帰っていく姿にスタッフ一同、目を細めて見送りました。

今回、学内有志グループの手掛けるプレスリリースの第一弾として、この「こどもといっしょのくらしかた」を取り上げていただき、おかげさまでタウンニュース緑区版と朝日新聞横浜・川崎版に記事を載せてもらうことができました。また広報さんには開催日まで定期的にSNSに告知していただくことができました。お陰様で大盛況とはいかないまでも、会場の空間に絶えず明るい笑顔と温かなぬくもりの流れる美しい催しとなりました。

横浜シュタイナー学園は成長の第2七年期（7～14歳）+1年に子どもたちの人生の土台を築く学校です。でもそれは健やかで健康な幼児期があってこそでもあります。ひとりの人間としての成長を考える時、幼児期と学童期は織り成すように繋がっていてこそその教育だと考えます。そのためにも横浜シュタイナー学園は今後もシュタイナー幼児教育をより太く、厚くしていくことに協力して参りたいと思います。



横浜シュタイナー学園 ～ Newsletter 第171号～
2025年10月23日発行
編集：広報の会
発行：NPO法人横浜シュタイナー学園
<https://yokohama-steiner.jp/>
〒226-0016 横浜市緑区霧が丘3丁目1-20
TEL 045-922-3107
※ 掲載内容の無断転載をお断りします